

令和 4 年 6 月 30 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03750

研究課題名(和文) 認知的コントロールとモニタリング機能に関する統合的理解

研究課題名(英文) Integrative understanding of cognitive control and monitoring

研究代表者

川口 潤 (Kawaguchi, Jun)

追手門学院大学・心理学部・教授

研究者番号：70152931

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、人が自分自身の心をどのようにコントロールしているのかを、認知研究の知見、研究手法を援用し、解明しようとするものであった。特に、コントロール機能の代表的な現象としてエピソード記憶の抑制に焦点を当てて進め、記憶の抑制の基礎メカニズム、個人差、未来の出来事の展望、モニタリング等について検討を行った。具体的には、検索誘導性忘却や意図的に忘れるThink/No-Think(TNT)課題などを用い、順序情報の想起やエピソード記憶想起において近年重要となっている詳細・概括的記憶の想起において抑制が働いていることを見出した。認知コントロール解明への多様なアプローチが重要であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は人間の情報処理におけるコントロール過程、特にエピソード記憶想起の制御に着目したものである。認知コントロールの代表的なものである記憶抑制による忘却メカニズムには明確でない面も多いが、本研究は忘却というコントロールの対象となった情報が抑止されるという結果を得ており、理論的学術的意義がある。また、記憶抑制は特に不快な記憶を抑制する機能と深く関わっていると考えられており、抑うつ者に見られる記憶の一般化・概括化(詳細な記憶想起が現象する)の背後に記憶抑制メカニズムがある可能性を見出した。これらのことは健常者の記憶想起メカニズム解明に加えて、精神疾患のメカニズム解明にも寄与する可能性がある。

研究成果の概要(英文)：This study attempted to elucidate how people control their minds by using the findings and research methods of cognitive research. In particular, we focused on the suppression of episodic memory as a representative phenomenon of the control function. We examined the mechanism of memory suppression, individual differences, envisioning future events, and memory monitoring. We used the Think/No-Think (TNT) task and a retrieval-induced forgetting to examine the function of inhibition of memory information. We found that inhibition occurred in a sequential memory task and the effect of retrieval of generalized memories on retrieval of specific memories. Various approaches to elucidating cognitive control were found to be significant.

研究分野：認知心理学、記憶心理学、認知科学

キーワード：認知コントロール 記憶抑制 エピソード記憶 メタ記憶 計算モデル

1. 研究開始当初の背景

認知心理学研究においては、人の意識的制御が困難な自動的処理と、意識的制御が可能な意識的処理が区別され、注意や記憶分野だけでなく、社会的認知や意思決定研究においても同様の区分が一般的となっていた (e.g., System 1, 2 の区分など; (Kahneman, 2003))。以前はどちらかという点に注目がなされていたが、一方で認知的コントロール(cognitive control)という用語も一般的になりつつあり、意識的制御過程への研究が増加していた時期であった。その点を背景に、我々は 2015 年には心理学評論において、「実行機能研究から心の制御を考える」特集号に関わり、認知コントロールの現況を整理した。

本研究では、認知コントロールの代表的要素である記憶制御が中心的課題の一つとした。記憶コントロールについては、(Anderson & Green, 2001)によって始まった Think/No Think 課題を用いた意識的忘却研究が進みつつあり、その抑制メカニズムの神経基盤(Benoit & Anderson, 2012)や PTSD などの精神疾患との関連の検討(Catarino et al., 2015)が指摘されるようになってきていた。ただし、一方で記憶の忘却が見られたとしてもその減少量は多くはなく(完全に忘却するわけではない)、他の心理特性への影響など、まだまだ未解明な点が多かった。また実験手法に関する検討や、記憶情報そのものが抑止されると考えるか、他の情報によるブロックと考えるかの理論的検討も必要な状況であった。

2. 研究の目的

本研究は、人が自分自身の心をどのようにコントロールしているのか、またコントロールしているという意識やモニタリングのメカニズムは何かといった問題を、認知心理学を中心としながら、認知神経科学等の隣接分野の知見を援用し、解明しようとするものであった。特に、記憶、注意分野での抑制研究に焦点を当てて進めていくこととした。具体的には以下が解明すべき目的とした点である。

・記憶の抑制の基礎メカニズム

記憶の忘却が干渉によるのか、記憶表象の抑制によるのかは議論がある。本研究では、行動実験的中心とした手法に加えて計算論的アプローチを用いて検討をおこなう。

・意図的抑制を外的に制御することが可能か

記憶の意図的抑制研究では、「考えない」ということを実験参加者に求める。しかし、容易な課題ではないため、うまく意図的抑制をできない場合も存在する。そこで、抑制の補助的方法があるかどうか検討を行う。

・コントロール能力の個人差

認知の抑制機能がうつ傾向と深く関係していることが明らかとなってきたが、そこでは不要な情報を抑制するといった認知コントロール能力の個人差を明確にすることが重要となってくる。そこで、コントロール能力の個人差について検討を行う。

・未来の出来事の想起・展望

これまでの多くの記憶抑制研究は、過去のエピソード記憶の抑制を扱ってきたが、近年、エピソード記憶が将来を予測する機能も持っている (Schacter et al., 2017)という指摘がある。記憶の抑制機能の解明ができれば、過去の記憶だけでなく、未来の想起に関するコントロールも可能になる可能性がある。記憶抑制研究はエピソード記憶理論の構築とも深く関わっており展望的記憶との関連から検討する。

・記憶のモニタリング

認知コントロールと対になる仕組みとして、自分自身の記憶判断をどのようにモニターするかといったメタ記憶がある。メタ記憶研究は実践場面を含めてなされているが、本申請ではより厳密な実験的手法で検討を行う。

3. 研究の方法

本研究は、人間が自分自身の心をどのように制御しているかを明らかにしようとするものであった。この目的のために、主として以下の点について研究を進めた。

・記憶の抑制の基礎メカニズムの解明

記憶の抑制の基礎メカニズムでは、検索誘導性忘却(retrieval induced forgetting)を扱った (Anderson et al., 2000)。検索誘導性忘却とは、ある情報を想起すると関連情報の想起が低下するという現象である。例えば、バナナ、リンゴ、飛行機、電車、といった単語を記憶したのち、バナナを思い出すとする。すると、その後にバナナと関連を持った(意味的関連のある)リンゴの想起を求めると、途中で関連情報を想起しなかった場合(飛行機、電車)と比べて、想起成績が低下、つまり忘却が起こることが知られている。この忘却の原因として、関連情報の想起によって思い出すべきターゲット情報そのものの活性化が抑止(suppress)されるという説と、想起時に関連情報がターゲット情報の検索を妨害する説(ターゲット情報そのものの状態は変化しない)とがあり、決着はついていない。

検索誘導性忘却は単語刺激のみならず、自分自身の体験の記憶、すなわち自伝的記憶想起にも生じることが予想される。また、さまざまな精神疾患における記憶想起の特徴も考えられることから、本申請では、自伝的記憶に関する検索誘導性忘却実験を行った。

- ・意図的抑制を外的に制御することが可能か

記憶の意図的抑制の神経基盤として前頭葉背外側部（DLPFC; dorso lateral prefrontal cortex）が関与していることが見出されている。例えば不快な記憶を思い出さないように努力する、つまり不快な記憶を抑制しようとし、結果的にその記憶の忘却が生じた場合には、前頭葉背外側部に賦活が見られるとともに、意識的想起に関わる海馬の活動が低下することが示されており、特に他の事柄を考えるのではなく(substitution)、そのこと自体を考えないようにする直接抑止(direct suppression)を行った場合に、そのような脳活動が見られると考えられる。そこで、tDCS(経頭蓋直流刺激)を用いて意図的抑制の主要関連部位である前頭葉背外側部を直接刺激することによる効果を検討することとした。

- ・コントロール能力の個人差

認知の抑制機能がうつ傾向と深く関係していることが明らかとなってきたが、特に不要な情報を抑制するといった認知コントロール能力の個人差が、その背景にあると考えられる。そこで、コントロール能力の個人差について検討を行う。抑制機能を測定する質問紙はこれまでにさまざまに作成が試みられているが、本研究では記憶の抑制機能と関連がある可能性が高い Thought Control Ability Questionnaire (TCAQ)を取り上げ、その日本語版作成に取り組むこととした。

- ・未来の出来事の想起に関する抑制

をもとに、展望記憶研究の手法を延焼しながら検討を進める。これまでの多くの記憶抑制研究は、過去のエピソード記憶を対象としてきたが、最近の研究では、過去の記憶想起が未来のプランニングに関連しているというエピソード的未來思考(episodic future thinking)の知見が報告されている。そこで、本申請では過去のエピソード記憶の想起や抑制が未来の展望と関わるという観点から、未來思考のプライミング実験を行う。

- ・記憶のモニタリング

記憶のコントロールと遂になる概念がモニタリングである。自分自身の状態をモニタリングし、それによってさまざまな処理をコントロールしていると考えられる。記憶の抑制とモニタリングを同時に扱った研究はなく、本研究では記憶情報検索結果に対する確信度を測定することで検討する。

4. 研究成果

- ・記憶の抑制の基礎メカニズムの解明

検索誘導線忘却の手法を用いた研究として、本研究では、意味情報による関連ではなく、これまで扱われていなかった順序情報(最初に見た、最後の方で見た、など)が検索誘導性忘却に用いられているかどうかを検討した。具体的には、6個の項目(ミカンなどの名詞)を系列学習し、最初の3つあるいは最後の3つを想起した後、最後にすべての項目を想起するという課題であった。その結果、前半の3項目を想起するとその後の3項目の記憶成績が低下するという検索誘導性忘却の現象が見られた。これは、今まで知られていなかった順序系列記憶にも記憶抑制メカニズムが関わっている可能性を示すものである。また並列分散処理を基礎とした計算機モデルによる検討を行ったところ、モデルによる予測は実験結果とよく一致するとともに、抑止説を支持するものであった。すでに学会発表は行っており(Kobayashi et al., 2018)、論文投稿中である。

記憶の抑制は、不快な記憶をうまく思い出さないようにできるかという働きでもあり、うつなどの精神疾患と関連していることが考えられる。自伝的記憶(エピソード記憶)想起の内容は詳細に想起される場合と詳細ではなく概括な形で想起される場合があるが、抑うつ傾向が高いと詳細な想起が少なく、概括的想起が多いことが知られている。そこで、概括的記憶早期を頒布することで詳細な記憶想起が抑制されるかどうかを検索誘導性忘却の手法を用いて検討した。その結果、概括的記憶の反復検索が検索誘導性忘却を介して、詳細な記憶表象を抑制していることが示された(Matsumoto et al., 2021)。

これらの結果は、記憶抑制がさまざまな情報の想起で生じること、またそのメカニズムは精神疾患の情報処理を明らかにする上でも重要であることを示すものと考えられる。

また、記憶抑制の神経基盤として、背側前頭前野の役割が指摘されているが、心因性健忘(psychogenic amnesia)患者の脳活動を再分析した。その結果、心因性健忘を呈している時期の脳活動では、背側前頭前野の活動が強く見られることが明らかとなった(Marsh et al., 2021)。論文を準備中である。

- ・意図的抑制を外的に制御することが可能か

tDCSの使用法やその限界も学習し、実験計画も立てたが、脳への侵襲刺激となるため、倫理審査が順調に進行しなかったため、結果的に現時点で予備実験段階に留まっている。ただし、類似の記憶抑制研究である指示忘却実験(Silas & Brandt, 2016)や検索誘導性忘却実験(Stramaccia et al., 2017)においてtDCSによる記憶抑制の変化が報告されているがThink/NoThink課題ではまだ明確でない。今後の研究課題として継続中である。

- ・コントロール能力の個人差

記憶コントロール能力の個人差について Thought Control Ability Questionnaire (TCAQ; (Williams

et al., 2010))を取り上げ、その日本語版作成を行った。25項目からなる質問項目を日本語に翻訳し、109名の参加者に対して複数回実施するなど、質問項目の構造や妥当性、信頼性の検討を行った。因子負荷量が低い項目を除外した22項目に対して因子分析を行い1因子構造が得られ、TCAQ日本語版とした。自分の思考のコントロールが困難なことを反映する反すうを測定する質問紙と強い負の相関を示すなど、認知コントロールを測定する質問紙として今後利用可能であることがわかった。

・未来の出来事の想起

過去のエピソード記憶の想起や抑制が未来の展望と関わるという観点から、未来思考のプライミング実験を行った。意図した行為はその後の記憶想起が優れることが知られているが(intention superiority effect)、想像した未来の行為についても、意図した行為を表す語の反応時間が短くなるという結果が得られた。すなわち未来の出来事の想像についても、これまで知られてきた現象が当てはまることを見出され、過去と未来の記憶に基づく類似した機構が働いていることが示唆された(Ito et al., 2019)。本実験では直接抑制機能を扱うことはできなかったが、同様の働きが生じているのではないかと推測される。

・記憶のモニタリング

本研究では風景画像の再認記憶課題を用いて記憶情報検索結果に対する確信度を測定し、することで検討した。この実験では風景画像を学習刺激とし、再認課題を2肢強制選択課題として実施した。その後、その再認判断に関する確信度を答えることを参加者に求めた。その結果、再認課題は2つの反応選択肢の類似度(記憶強度を実験的に操作)の影響を受けたが、確信度は再認判断と確信度は異なった情報を元になされていることが明らかとなった。記憶検索に関する確信度はいわゆるモニタリング、メタ記憶機能と考えることができるが、その特徴を捉えることができた。記憶検索の内容に関する確信度の推定が、再認成績とは異なった基準にもとづいていることを信号検出理論を用いた再認実験によって見いだした(Miyoshi et al., 2018)。

・まとめ

本研究で実施してきた一連の研究は、認知コントロールのメカニズムとその機能の解明を念頭に置いて進めてきた。記憶の抑制に焦点をあててきたが、基本的には自分自身の体験の記憶、すなわちエピソード記憶想起における抑制、コントロールである。記憶の忘却メカニズムについて、理論的には記憶そのものの活性化が抑止されると考える立場と、抑止ではなく干渉・ブロッキングで説明できるという立場がある。一連の研究は直接その両者の成否を比較したわけではないが、全体として抑止説を支持する研究結果が得られていると考えられる。さらに一連の研究は、主として健常者を対象として進めてきたものであるが、さまざまな精神疾患と関連していることが世界的に見出されてきている。次の段階は、これらの基礎研究が精神疾患の回復を支えるものとなるようにすることが重要であると考えている。

最後に、本研究期間の途中からコロナ禍が広がり、実験室内での長時間の個人実験が中心となる研究は実施することができなかった。オンラインでの手法を試みたが、可能な部分もあるものの困難な面も多く、期待通りには進まなかった面がある。新たな手法を踏まえて、今後の検討課題としたい。

なお、記憶抑制実験の再現性確認国際共同プロジェクトが2022年からスタートし、引き続き同テーマについて検討を進めている。

引用文献

- Anderson, M. C., Bjork, E. L., & Bjork, R. A. (2000). Retrieval-induced forgetting: evidence for a recall-specific mechanism. *Psychonomic Bulletin & Review*, 7(3), 522 - 530.
- Anderson, M. C., & Green, C. (2001). Suppressing unwanted memories by executive control. *Nature*, 410(6826), 366-369. <https://doi.org/10.1038/35066572>
- Benoit, R. G., & Anderson, M. C. (2012). Opposing Mechanisms Support the Voluntary Forgetting of Unwanted Memories. *Neuron*, 76(2), 450 - 460. <https://doi.org/10.1016/j.neuron.2012.07.025>
- Catarino, A., Kupper, C. S., Werner-Seidler, A., Dalgleish, T., & Anderson, M. C. (2015). Failing to forget: inhibitory-control deficits compromise memory suppression in posttraumatic stress disorder. *Psychological Science*, 26(5), 604-616. <https://doi.org/10.1177/0956797615569889>
- Ito, Y., Terasawa, Y., Umeda, S., & Kawaguchi, J. (2019). Spontaneous Activation of Event Details in Episodic Future Simulation. *Frontiers in Psychology*, 10, 625. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2019.00625>
- Kahneman, D. (2003). A perspective on judgment and choice: mapping bounded rationality. *The*

- American psychologist*, 58(9), 697 - 720. <https://doi.org/10.1037/0003-066x.58.9.697>
- Kobayashi, M., Ueno, T., & Kawaguchi, J. (2018). Retrieval-induced forgetting of serial order memory: A pre-registered investigation. In.
- Marsh, L., Apsvalka, D., Abe, N., Kawaguchi, J., & Anderson, M. (2021, 8/26-27/2021). *The role of memory control systems in psychogenic amnesia* Autobiographical Memory & Psychopathology Meeting, Online.
- Matsumoto, N., Mochizuki, S., Marsh, L., & Kawaguchi, J. (2021). Repeated retrieval of generalized memories can impair specific autobiographical recall: A retrieval induced forgetting account. *Journal of Experimental Psychology: General*. <https://doi.org/10.1037/xge0001028>
- Miyoshi, K., Kuwahara, A., & Kawaguchi, J. (2018). Comparing the confidence calculation rules for forced-choice recognition memory: A winner-takes-all rule wins. *Journal of Memory and Language*, 102, 142-154. <https://doi.org/10.1016/j.jml.2018.06.001>
- Schacter, D. L., Benoit, R. G., & Szpunar, K. K. (2017). Episodic future thinking: mechanisms and functions. *Current Opinion in Behavioral Sciences*, 17, 41 - 50. <https://doi.org/10.1016/j.cobeha.2017.06.002> PMID - 29130061
- Silas, J., & Brandt, K. R. (2016). Frontal transcranial direct current stimulation (tDCS) abolishes list-method directed forgetting. *Neuroscience Letters*, 616, 166 - 169. <https://doi.org/10.1016/j.neulet.2016.01.035>
- Stramaccia, D. F., Penolazzi, B., Altoè, G., & Galfano, G. (2017). TDCS over the right inferior frontal gyrus disrupts control of interference in memory: A retrieval-induced forgetting study. *Neurobiology of Learning and Memory*, 144, 114 - 130. <https://doi.org/10.1016/j.nlm.2017.07.005> PMID - 28709999
- Williams, A. D., Moulds, M. L., Grisham, J. R., Gay, P., Lang, T., Kandris, E., Werner-Seidler, A., & Yap, C. (2010). A psychometric evaluation of the Thought Control Ability Questionnaire (TCAQ) and the prediction of cognitive control. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 32(3), 397 - 405. <https://doi.org/10.1007/s10862-009-9171-z>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計30件（うち査読付論文 25件 / うち国際共著 9件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|------------------------|
| 1. 著者名 UEDA Yoshiyuki, OTSUKA Sachio, SAIKI Jun | 4. 巻 63 |
| 2. 論文標題 A THREE-LEVEL APPROACH TO UNDERSTAND CULTURAL VARIABILITY AND THE EVOLUTION OF HUMAN ATTENTION | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 PSYCHOLOGIA | 6. 最初と最後の頁 96 ~ 115 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2117/psysoc.2021-b015 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 Katayama Nariko, Nakagawa Atsuo, Umeda Satoshi, Terasawa Yuri, Abe Takayuki, Kurata Chika, Sasaki Yohei, Mitsuda Dai, Kikuchi Toshiaki, Tabuchi Hajime, Mimura Masaru | 4. 巻 298 |
| 2. 論文標題 Cognitive behavioral therapy effects on frontopolar cortex function during future thinking in major depressive disorder: A randomized clinical trial | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Affective Disorders | 6. 最初と最後の頁 644 ~ 655 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jad.2021.11.034 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------------|
| 1. 著者名 Katayama Nariko, Nakagawa Atsuo, Umeda Satoshi, Terasawa Yuri, Kurata Chika, Tabuchi Hajime, Kikuchi Toshiaki, Mimura Masaru | 4. 巻 23 |
| 2. 論文標題 Frontopolar cortex activation associated with pessimistic future-thinking in adults with major depressive disorder | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 NeuroImage: Clinical | 6. 最初と最後の頁 101877 ~ 101877 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.nicl.2019.101877 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------------|
| 1. 著者名 Shinagawa Kazushi, Ito Yuichi, Tsuji Koki, Tanaka Yuto, Odaka Mana, Shibata Midori, Terasawa Yuri, Umeda Satoshi | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 Temporal changes in attentional resources consumed by mind-wandering that precede awareness: An ERP study | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Neuroimage: Reports | 6. 最初と最後の頁 100060 ~ 100060 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ynirp.2021.100060 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 小林正法 | 4. 巻 92 |
| 2. 論文標題 再生テストに基づく記憶現象の オンライン実験による再現 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 心理学研究 | 6. 最初と最後の頁 463 ~ 472 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.92.20213 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Matsumoto Noboru, Watson Lynn Ann, Fujino Masahiro, Ito Yuichi, Kobayashi Masanori | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Subjective judgments on direct and generative retrieval of autobiographical memory: The role of interoceptive sensibility and emotion | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Memory & Cognition | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3758/s13421-022-01280-8 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 大杉尚之・小林正法 | 4. 巻 19 |
| 2. 論文標題 GUIベースのweb実験作成ツール (lab.js) の紹介と実践 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 認知心理学研究 | 6. 最初と最後の頁 1-15 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5265/jcogpsy.19.1 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 NISHIYAMA Satoru, SAITO Satoru | 4. 巻 63 |
| 2. 論文標題 TRANSFERABLE INHIBITION OF DIRECT SUPPRESSION: EVIDENCE FROM A DOT-PROBE TASK | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 PSYCHOLOGIA | 6. 最初と最後の頁 20 ~ 41 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2117/psychsoc.2020-A112 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 Miyoshi Kiyofumi, Kuwahara Ayumi, Kawaguchi Jun | 4. 巻 102 |
| 2. 論文標題 Comparing the confidence calculation rules for forced-choice recognition memory: A winner-takes-all rule wins | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Memory and Language | 6. 最初と最後の頁 142 ~ 154 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jml.2018.06.001 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 Lee Tae-Ho, Greening Steven G., Ueno Taiji, Clewett David, Ponzio Allison, Sakaki Michiko, Mather Mara | 4. 巻 2 |
| 2. 論文標題 Arousal increases neural gain via the locus coeruleus/noradrenaline system in younger adults but not in older adults | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Nature Human Behaviour | 6. 最初と最後の頁 356 ~ 366 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41562-018-0344-1 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|---|---------------------------|
| 1. 著者名 Allen Richard J., Ueno Taiji | 4. 巻 80 |
| 2. 論文標題 Multiple high-reward items can be prioritized in working memory but with greater vulnerability to interference | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Attention, Perception, & Psychophysics | 6. 最初と最後の頁 1731 ~ 1743 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3758/s13414-018-1543-6 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|--|---------------------------|
| 1. 著者名 Ueno Taiji, Meteyard Lotte, Hoffman Paul, Murayama Kou | 4. 巻 28 |
| 2. 論文標題 The Ventral Anterior Temporal Lobe has a Necessary Role in Exception Word Reading | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Cerebral Cortex | 6. 最初と最後の頁 3035 ~ 3045 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/cercor/bhy131 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 梅田 聡 | 4. 巻 70 |
| 2. 論文標題 頭頂葉内側部における符号化・検索処理の機能解剖学 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 BRAIN and NERVE | 6. 最初と最後の頁 763-769 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|------------------------|
| 1. 著者名 Miyoshi, K., Kuwabara, A., & Kawaguchi, J. | 4. 巻 102 |
| 2. 論文標題 Comparing the confidence calculation rules for forced-choice recognition memory: A winner-takes-all rule wins. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Memory and Language. | 6. 最初と最後の頁 142-1554 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jml.2018.06.001 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|------------------------|
| 1. 著者名 Shibata, M., Terasawa, Y., Osumi, T., Masui, K., Ito, Y., Sato, A., & Umeda, S | 4. 巻 1657 |
| 2. 論文標題 Time course and localization of brain activity in humor comprehension: An ERP/sLORETA study | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 Brain Research | 6. 最初と最後の頁 215-222. |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.brainres.2016.12.010 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 Yanaoka, K., & Saito, S. | 4. 巻 163 |
| 2. 論文標題 Developing control over the execution of scripts: The role of maintained hierarchical goal representations | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Experimental Child Psychology | 6. 最初と最後の頁 87-106 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jecp.2017.06.008 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 Maehara Yukio, Saito Satoru, Towse John Nicholas | 4. 巻 83 |
| 2. 論文標題 Joint cognition and the role of human agency in random number choices | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 Psychological Research | 6. 最初と最後の頁 574 ~ 589 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s00426-017-0944-9 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Lee T., Greening S., Ueno T., Clewett D., Ponzio, A., Sakaki M., & Mather M. | 4. 巻 2 |
| 2. 論文標題 Arousal increases neural gain via the locus coeruleus-norepinephrine system in younger adults but not in older adults | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Nature Human Behavior | 6. 最初と最後の頁 356-366 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41562-018-0344-1 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 小林正法・服部陽介・上野泰治・川口潤 | 4. 巻 87 |
| 2. 論文標題 日本語版 Thought Control Ability Questionnaire の 作成及び信頼性・妥当性の検討 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 心理学研究 | 6. 最初と最後の頁 405-414 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------------------|
| 1. 著者名 Ikeda, K., Ueno, T., Ito, Y., Kitagami, S., & Kawaguchi, J. | 4. 巻 Version of Record online |
| 2. 論文標題 An Extension of a Parallel-Distributed Processing Framework of Reading Aloud in Japanese: Human Nonword Reading Accuracy Does Not Require a Sequential Mechanism. | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 Cognitive Science | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/cogs.12382 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 Nakamura, H., & Kawaguchi, J. | 4. 巻 11 |
| 2. 論文標題 People Like Logical Truth: Testing the Intuitive Detection of Logical Value in Basic Propositions. | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 PloS One | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0169166 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 Umeda, S., Tochizawa, S., Shibata, M., & Terasawa, Y. | 4. 巻 371 |
| 2. 論文標題 Prospective memory mediated by interoceptive accuracy: A psychophysiological approach. | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1098/rstb.2016.0005 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 Ueda Yoshiyuki, Chen Lei, Kopecky Jonathon, Cramer Emily S., Rensink Ronald A., Meyer David E., Kitayama Shinobu, Saiki Jun | 4. 巻 42 |
| 2. 論文標題 Cultural Differences in Visual Search for Geometric Figures | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 Cognitive Science | 6. 最初と最後の頁 286 ~ 310 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/cogs.12490 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 Ueda Yoshiyuki, Kamakura Yusuke, Saiki Jun | 4. 巻 59 |
| 2. 論文標題 Eye Movements Converge on Vanishing Points during Visual Search | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 Japanese Psychological Research | 6. 最初と最後の頁 109 ~ 121 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12144 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 Higuchi, Y., Ueda, Y., Ogawa, H., & Saiki, J. | 4. 巻 78 |
| 2. 論文標題 Task-relevant information is prioritized in spatiotemporal contextual cueing. | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 Attention, Perception & Psychophysics | 6. 最初と最後の頁 2397-2410 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3758/s13414-016-1198-0 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 Higuchi Yoko, Saiki Jun | 4. 巻 59 |
| 2. 論文標題 Implicit Learning of Spatial Configuration Occurs without Eye Movement | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 Japanese Psychological Research | 6. 最初と最後の頁 122 ~ 132 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12147 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Hattori, Y., & Kawaguchi, J. | 4. 巻 35 |
| 2. 論文標題 Individuals with dysphoria keep thinking "Try not to think" during distraction: The effect of meta-awareness of suppression on the relationship between depression and intrusive thoughts | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Social and Clinical Psychology | 6. 最初と最後の頁 664-692 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 梅田聡 | 4. 巻 36 |
| 2. 論文標題 情動を生み出す「脳・心・身体」のダイナミクス: 脳画像研究と神経心理学研究からの統合的理解 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 高次脳機能研究 | 6. 最初と最後の頁 265-270 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 梅田聡 | 4. 巻 68 |
| 2. 論文標題 情動障害と発汗異常 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 BRAIN and NERVE | 6. 最初と最後の頁 893-901 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Ueno, T., Fastrich, G. M., & Murayama, K. | 4. 巻 145 |
| 2. 論文標題 Meta-analysis to integrate effect sizes within an article: Possible misuse and Type I error inflation | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Experimental Psychology: General | 6. 最初と最後の頁 643-654 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

〔学会発表〕 計43件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 23件)

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 小林正法 |
| 2. 発表標題 テクノロジーとエピソード記憶 |
| 3. 学会等名 第19回日本認知心理学会大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 大杉尚之・小林正法 |
| 2. 発表標題 “ヒト”のここをスマホのブラウザで測ってみよう! |
| 3. 学会等名 2021年度 日本基礎心理学会公開シンポジウム (招待講演) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 小林正法・国里愛彦・大杉尚之・西山慧・紀ノ定保礼・遠山朝子 |
| 2. 発表標題 はじめての オンライン心理学実験・調査: jsPsychとlab.jsを用いた作成 |
| 3. 学会等名 第85回日本心理学会大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Matstumoto, N., & Kobayashi, M. |
| 2. 発表標題 Autobiographical memory specificity and mnemonic discrimination |
| 3. 学会等名 Autobiographical Memory & Psychopathology Meeting (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 川口潤 |
| 2. 発表標題 エピソード科学: 記憶研究の新たな視点 |
| 3. 学会等名 第19回日本認知心理学会大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 小林正法 |
| 2. 発表標題 テスト効果はオンライン実験で生じるのか |
| 3. 学会等名 日本基礎心理学会40回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Kobayashi, M., Ueno, T., Kawaguchi, J. |
| 2. 発表標題 Retrieval-induced forgetting of serial order memory: A pre-registered investigation |
| 3. 学会等名 59th Annual Meeting of the Psychonomic Society (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 小林正法・上野泰治・川口潤 |
| 2. 発表標題 系列記憶の検索誘導性忘却：事前登録による実証 |
| 3. 学会等名 認知心理学会第16回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-------------------------|
| 1. 発表者名 川口潤・小林正法 |
| 2. 発表標題 エピソード記憶の新展開 |
| 3. 学会等名 認知心理学会第16回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yanaoka, K., & Saito, S. |
| 2. 発表標題 Dynamic representation of task contexts in routine sequential actions by young children. |
| 3. 学会等名 the 30th APS Annual Convention of Association for Psychological Science (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Nishiyama, S., & Saito, S. |
| 2. 発表標題 An experimental attempt to facilitate memory retrieval through inhibition of competing items. |
| 3. 学会等名 the 30th APS Annual Convention of Association for Psychological Science (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 西山慧・齊藤智 |
| 2. 発表標題 記憶の検索は競合する記憶の抑制によって促進されるか |
| 3. 学会等名 日本認知心理学会第15回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 西山慧・齊藤智 |
| 2. 発表標題 抑制による記憶の活性速度の低下 逐次サンプリングモデルを用いた検討 |
| 3. 学会等名 日本心理学会第82回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Towse, J. N., Saito, S., & Maehara, Y. |
| 2. 発表標題 A problem shared is not always a problem halved: Joint cognition and random sequence generation |
| 3. 学会等名 the Joint Meeting of the Experimental Psychology Society and Canadian Society for Brain, Behaviour and Cognitive Science (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Miyosi, K., Kawaguchi, J. |
| 2. 発表標題 Hierarchical modelling of eye-tracking data reveals flexibly changing spatial patterns of the sense of familiarity |
| 3. 学会等名 the 58th Annual Meeting of the Psychonomic Society (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 三好清文, 蘆田宏, 川口潤 |
| 2. 発表標題 空間的注意による親近性ブースト-信号検出モデルによる検討- |
| 3. 学会等名 日本心理学会第81回大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 多賀禎, 川口潤 |
| 2. 発表標題 忘れた後で再び見た時,見えづらくなる?-指示忘却の潜在記憶テストへの影響- |
| 3. 学会等名 日本心理学会第81回大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Taga, T., & Kawaguchi, J. |
| 2. 発表標題 Directed forgetting in face orientation judgment task. |
| 3. 学会等名 OPAM2017 (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 多賀禎, 川口潤 |
| 2. 発表標題 忘れた後で再び見た時,見えづらくなる?-指示忘却が顔画像の潜在記憶テストへ与える影響- |
| 3. 学会等名 日本認知心理学会第15回大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Atkinson, A. L., Berry, E. D. J., Waterman, A. H., Baddeley, A. D., Hitch, G. J., Ueno, T., & Allen, R. J |
| 2. 発表標題 Are there multiple ways to direct attention in visual working memory? |
| 3. 学会等名 European Society for Cognitive Psychology (ESCoP) meeting. (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Umeda, S., Terasawa, Y., Nishikata, S., Kikuchi, T., Maeda, T., & Den, R. |
| 2. 発表標題 The encoding/retrieval flip in the posteromedial cortex and associated anterior PFC activations.線? |
| 3. 学会等名 The Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Ito, Y., Shibata, M., Tanaka, Y., Terasawa, Y., & Umeda, S. |
| 2. 発表標題 Temporal and affective orientation of thought in depression and anxiety: An ERP and HEP study |
| 3. 学会等名 The 56th Annual Meeting of the Society for Psychophysiological Research. (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Yanaoka, K., & Saito, S. |
| 2. 発表標題 Development of hierarchical goal representation in the control of script execution. |
| 3. 学会等名 日本認知心理学会第15回大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 柳岡開地・齊藤智 |
| 2. 発表標題 ルーティン実行中の場面情報保持メカニズムの発達の検討 |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Honma, Y., & Kawaguchi, J. |
| 2. 発表標題 Memory suppression and its influence on emotional valence of memory. |
| 3. 学会等名 ICOM6: 6th International Conference on Memory. (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Ito, Y., & Kawaguchi, J. |
| 2. 発表標題 Spontaneous Activation of Concepts Associated with Events in Episodic Future Thinking. |
| 3. 学会等名 ICOM6: 6th International Conference on Memory. (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Kobayashi, M., & Kawaguchi, J. |
| 2. 発表標題 She is less attractive because I forgot her: Forgetting leads to devaluation of faces. |
| 3. 学会等名 ICOM6: 6th International Conference on Memory. (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Taga, T., Kobayashi, M., & Kawaguchi, J. |
| 2. 発表標題 Individual differences in thought control ability and item-method directed forgetting. |
| 3. 学会等名 ICOM6: 6th International Conference on Memory. (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Kobayashi, M., & Kawaguchi, J. |
| 2. 発表標題 Saving some information on external media helps other information within our internal memory: A case of photographing. |
| 3. 学会等名 International Meeting of the Psychonomic Society. (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Kobayashi, M., & Kawaguchi, J. |
| 2. 発表標題 Retrieval-Induced Forgetting of Non-Verbal Visual Objects. |
| 3. 学会等名 57th Annual Meeting of the Psychonomic Society (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Taga, T., Kobayashi, M., Ueno, T., & Kawaguchi, J. |
| 2. 発表標題 Individual differences in interpreting random dot pattern as humans influence face priming effect. |
| 3. 学会等名 The 31st International Congress of Psychology (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 川口潤 |
| 2. 発表標題 忘れられる？考えないようにできる？ |
| 3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会 第25回大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 小林正法・川口潤 |
| 2. 発表標題 写真を撮ると記憶が良くなる？ |
| 3. 学会等名 日本認知心理学会第14回大会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 多賀禎・小林正法・川口潤 |
| 2. 発表標題 思考制御能力の高い人はよく忘れられるか？ |
| 3. 学会等名 日本認知心理学会第14回大会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 小林正法・川口潤 |
| 2. 発表標題 私を忘れないで-忘却が導く価値の低下- |
| 3. 学会等名 日本基礎心理学会第35回大会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Ito, Y., Shibata, M., Tanaka, Y., Terasawa, Y., & Umeda, S. |
| 2. 発表標題 Temporal characteristics of thought orientation: An ERP study. |
| 3. 学会等名 The 31st International Congress of Psychology (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 伊藤友一・柴田みどり・田仲祐登・寺澤悠理・梅田聡 |
| 2. 発表標題 思考の時間的・感情的方向性: 事象関連電位と心拍誘導電位による検討 |
| 3. 学会等名 第19回日本ヒト脳機能マッピング学会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Saiki, J. |
| 2. 発表標題 Binding of non-spatial features in visual working memory |
| 3. 学会等名 The 31st International Congress of Psychology. (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Saiki, J. & Shibata, S. |
| 2. 発表標題 Effects of previewing intrinsic color-shape conjunction on temporal illusory conjunctions |
| 3. 学会等名 Vision Sciences Society 16th Annual Meeting (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Sanada, M., Ueno, T., & Allen, R. J. |
| 2. 発表標題 Does eye fixation have a functional role in visual memory retrieval? Further insights from error analysis. |
| 3. 学会等名 Psychonomic Society's 57th Annual Meeting (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Nishiyama, S., & Saito, S. |
| 2. 発表標題 Aftereffects of retrieval stopping: Evidence from a dot-probe task |
| 3. 学会等名 The meeting of the Experimental Psychology Society (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 田中哲平・齊藤智 |
| 2. 発表標題 読み中のハイライト付与行動とワーキングメモリ容量の関連性 |
| 3. 学会等名 日本ワーキングメモリ学会第14回大会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Marsh, L., Apsvalka, D., Abe, N., Kawaguchi, J., & Anderson, M. |
| 2. 発表標題 The role of memory control systems in psychogenic amnesia |
| 3. 学会等名 Autobiographical Memory & Psychopathology Meeting (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 E・ブルース・ゴールドスタイン、川口潤、ネルソンサトコ | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 ニュートンプレス | 5. 総ページ数 320 |
| 3. 書名 ザ・マインド 意識とは何か | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---------------------------------------|----------------------------------|----|
| 研究分担者 | 齋木 潤 (Saiki Jun) (60283470) | 京都大学・人間・環境学研究所・教授 (14301) | |
| 研究分担者 | 齊藤 智 (Saito Satoru) (70253242) | 京都大学・教育学研究科・教授 (14301) | |
| 研究分担者 | 梅田 聡 (Umeda Satoshi) (90317272) | 慶應義塾大学・文学部(三田)・教授 (32612) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 研究分担者 | 小林 正法 (Kobayashi Masanori) (60723773) | 山形大学・人文社会科学部・准教授 (11501) | |
| 研究分担者 | 上野 泰治 (Ueno Taiji) (20748967) | 東京女子大学・現代教養学部・准教授 (32652) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |